

博士論文審査及び最終試験の結果

審査委員（主査）

呉人 徳司



学位申請者 スチンガルラ（スチンガルラ）

論文名 モンゴル語の方向性を持つ補助動詞について
—内モンゴルの文語資料を中心に—

結論

スチンガルラ氏から提出された学位請求論文「モンゴル語の方向性を持つ補助動詞について—内モンゴルの文語資料を中心に—」について、論文審査と口述による最終試験の結果、審査委員会は博士（学術）の学位を授与するにふさわしい研究であるとの結論に達した。

なお、審査委員会は本学アジア・アフリカ言語文化研究所の呉人を主査に、副査として同じく山越康裕准教授、本学の野元裕樹准教授、早津恵美子本学名誉教授、主任指導教員である風間伸次郎教授を加えた5名で構成された。

論文の概要

本論文はモンゴル語の方向性を持つ9つの補助動詞の意味機能を分析した論文である（なおここでいうモンゴル語とは、内モンゴル中部方言を指している）。まずコーパスにより、主に各補助動詞と共に起る主動詞の性質（意志性、限界性、瞬間性）、主動詞に後続する副動詞接尾辞、同じく後続する肯定・否定表現の出現状況を分析し、方向性を持つ補助動詞に関して先行研究では指摘されていない意味機能を解明することに成功している。さらにアンケートを実施して上記の意味機能について確認するとともに方言差についても解明を行っている。

本論文の構成は以下のようになっている。

第1章では、まず、補助動詞の定義、補助動詞の分類、及び本研究で扱う補助動詞の位置づけを取り上げ、次に、補助動詞の意味の実現は、主動詞の性質（限界性・瞬間性・意志性）、副動詞接尾辞の意味と深く関わっていると仮定し、動詞分類を行い、副動詞接尾辞の意味について言及している。

第2章では、補助動詞 ab-（もらう）、ög-（あげる、くれる）、ali-（もらう）の意味機能について述べ、これら補助動詞の意味が実現する条件を明らかにした。

まず①授受的意味を表す場合、補助動詞 ög-, ab- は、遠心的方向性、求心的方向性の両方を表せるのに対し、補助動詞 ali- は、求心的方向性のみ表す。補助動詞 ög-, ab- は、「身

内」、「ヨソモノ」などの人称制限がないが、補助動詞 *ali-* は、話し手、あるいは話し手の「身内」にのみ使われ、かつ命令・希求形表現のみと共起する。補助動詞 *ög-, ab-* は否定表現と共起することが可能であるが、補助動詞 *ali-* は否定表現と共起することが不可能である。補助動詞 *ab-, ali-* は、意志動詞とのみ共起するが、補助動詞 *ög-* は、意志動詞、無意志動詞どちらとも共起する。ただし、無意志動詞と共起する場合は、必ず否定表現と共起する。

次に②アスペクト的意味を表す場合、補助動詞 *ög-, ab-* は、両方とも限界動詞に後続し「行為の完遂の」意味を表す。この場合は、補助動詞 *ög-* の主動詞の位置に、無意志動詞がくるのに対し、補助動詞 *ab-* の主動詞の位置には意志動詞がきている。両方とも否定表現と共起しない。補助動詞 *ab-* は、「行為の完遂」を表す他、「元の状態に戻る」という意味、「行為の開始」などのアスペクト的意味をも表す。

最後に③モダリティ的意味を表す場合、授受的意味を表す場合の補助動詞 *ög-* は、日本語の「～てやる」のように「自棄自虐、強い意志」の意味を表す場合もあれば、「～てくれる」のように「不利益・迷惑」を表す場合もある。「行為の完遂」を表す補助動詞 *ög-, ab-*、「行為の開始」を表す補助動詞 *ab-* には「マイナスの感情・評価的意味」を表す場合がある。

第3章では、補助動詞 *oru-*（入る）、*yar-*（出る）の意味機能について述べ、これらの補助動詞のさまざまな意味が実現する諸条件を明らかにしている。

まず①アスペクト的意味を表す場合に、補助動詞 *oru-* は、マイナスの意味を持つ言語活動動詞に付き、「行為の開始」を表し、*nebtöre-*（貫く）、*günjegeyire-*（深化する）という主体変化動詞に付き、「進行相」を表す。それに対し、補助動詞 *yar-* は、一時的な状態を表す主体動作動詞、内的情態動詞に付き、「元の状態に戻る」という意味を表し、*edürjin*（一日中）、*sönijin*（一晩中）、*kejiyede*（いつも）などの時間副詞と共起し、「行為の持続」を表す。また動作動詞に付き、「行為の完遂」、変化動詞に付き、「変化の達成」を表す。補助動詞 *yar-* は、「行為の開始」を表す場合もあるが、その意味の実現は文脈に依るものであると考えられる。

モダリティ的意味を表す場合に、補助動詞 *oru-* は、「条件可能」のみを表すのに対し、補助動詞 *yar-* は、「条件可能」、「能力可能」の両方を表す。補助動詞 *oru-* は、「中に入る」という方向性がイメージできる動詞に付くが、補助動詞 *yar-* は、「外に出す」という方向性がイメージできる動詞に付く。補助動詞 *yar-* は、「可能」の意味を表す他、弁別に関わる動詞に付き、「見分けが付く」という意味をも表す。

第4章では、補助動詞 *ire-*（くる）、*yabu-*（いく）、*oçi-*（いく）、*od-*（いく）の意味機能について述べ、これらの補助動詞の意味が実現する条件を明らかにした。

1. 「持続相」を表す場合

「持続相」を表す補助動詞には、補助動詞 *ire-, yabu-* がある。これらの補助動詞は、主動詞の限界性・瞬間性により、「動作の持続」、「結果持続」、「反復」などを表す。補助動詞 *ire-* は、過去から現在までの持続を表すが、補助動詞 *yabu-* は、過去から現在までの持続を表す他、現在から未来への持続、過去のある時点からある時点までの持続をも

表す。

2. 「進行相」を表す場合

「進行相」を表す補助動詞には、補助動詞 *ire-*, *yabu-*, *oči-* がある。補助動詞 *ire-* は、出現動詞、進展的動詞、終了限界達成を含む動詞に付くのに対し、補助動詞 *yabu-* は、進展的動詞、消滅動詞などの終了限界達成を含む動詞に付く。一方、補助動詞 *oči-* は、瞬間性のない限界動詞に付く。補助動詞 *ire-* は、マイナスの意味を持つ言語活動動詞に付き、「行為の開始」と「進行相」を同時に表す場合もある。

3. 「変化の達成」を表す場合

「変化の達成」を表す補助動詞には、補助動詞 *oči-*, *od-* がある。補助動詞 *oči-* は、消滅を表す瞬間性のある主体変化動詞と状態変化動詞に付くが、補助動詞 *od-* は、消滅を表す瞬間性のある主体変化動詞と経過動詞に付く。

4. 「行為の完遂」を表す場合

「行為の完遂」を表す補助動詞には、補助動詞 *ire-* がある。意志的に行う終了限界達成を含む主体動作・客体変化動詞に付く。

5. 「手段」と「状況」を表す場合

「手段」と「状況」を表す補助動詞には、補助動詞 *ire-* がある。意志的に行う主体動作動詞に付く場合は、「手段」を表し、非意志的に行う主体動作動詞に付く場合は、「状況」を表す。

第5章では、アスペクト的意味観点、モダリティ的意味観点から、これらの補助動詞の相違点をまとめている。

1. アスペクト的意味を表す場合

アスペクト的意味を表す補助動詞には、補助動詞 *ög-*, *ab-*, *oru-*, *yar-*, *ire-*, *yabu-*, *oči-*, *od-* がある。

A. 「行為の開始」を表す補助動詞には、補助動詞 *ire-*, *ab-*, *oru-*, *yar-* がある。補助動詞 *yar-* 以外は、マイナスの意味を持つ言語活動動詞と内的情態動詞につき、「行為の開始」を表すと同時に、マイナスの感情および評価的意味を表す。

B. 「行為の完遂・変化の達成」を表す補助動詞には、補助動詞 *yar-*, *ab-*, *ög-*, *od-*, *oči-*, *ire-* がある。補助動詞 *yar-* 以外は限界動詞（主体動作・客体変化動詞、主体変化動詞、内的情態動詞）に付く。

C. 「元の状態に戻る」という意味を表す補助動詞には、補助動詞 *yar-*, *ab-* がある。補助動詞 *yar-* は、非限界動詞（主体動作動詞、内的情態動詞）に後続して使われるが、補助動詞 *ab-* は、非限界動詞、限界動詞のどちらにも後続して使われる。

D. 「持続相」を表す補助動詞には、補助動詞 *yabu-*, *ire-*, *yar-* がある。これらの補助動詞は、意志動詞、無意志動詞、限界動詞、非限界動詞のいずれとも共起することができるが、主動詞の位置に主体動作・客体変化動詞がくる場合は、その動詞は客体の位置変化をひきおこす動詞、もしくは所有関係の変化をひきおこす動詞に限られ、主体変化動詞がくる場合は、位置変化動詞に限られる。

E. 「進行相」を表す補助動詞には、補助動詞 *ire-*, *yabu-*, *oči-*, *oru-* がある。意志動詞、無

意志動詞、限界動詞、非限界動詞のいずれとも共起することができるが、補助動詞 *yabu-* 以外は瞬間性のない動詞に限る。非限界動詞に後続する場合は、主動詞の位置に、進展的過程を持たない動詞がきているが、限界動詞の場合は、補助動詞 *yabu-* を除き、主動詞の位置に、進展的過程を持つ動詞がきている。

2. モダリティ的意味を表す場合

A. アスペクト的意味、モダリティ的意味を同時に表す補助動詞には、*ög-*, *ab-*, *oru-*, *γar-*, *ire-* などがある。補助動詞 *ire-*, *ab-*, *oru-* は、マイナスの意味を表す言語活動動詞に付き、「行為の開始」を表すと同時にマイナス感情・評価の意味も表す。補助動詞 *ab-*, *ög-* は、マイナスの意味を持つ主体変化動詞に付き、「行為の完遂・変化の達成」を表すと同時に話者のマイナス感情・評価の意味を表す。補助動詞 *γar-* は、時間的副詞と共起し、「行為の持続」を表すと同時に話者のマイナス感情・評価の意味を表す。

B. モダリティ的意味のみを表す補助動詞には、補助動詞 *oru-*, *γar-* がある。

第6章では、特に本論文が先行研究に対して新たな知見を加えた点について、補助動詞別に整理した上、今後の課題について述べている。

本論文では、主に主動詞の性質（意志性、限界性、瞬間性）、主動詞に後続する副動詞接尾辞、補助動詞に後続する肯定・否定表現に注目して研究を進めることにより、方向性を持つ補助動詞に関して、先行研究で既に指摘されている意味機能を確認すると同時に、先行研究で指摘されていない意味機能を示している。そして、主に主動詞の観点から、それらの意味が実現する諸条件を明らかにしている。副動詞接尾辞の観点からも以下のようなことを解明している。① *-ju* は、主動詞と補助動詞を結びつける場合に、もっとも一般的に使われる接尾辞である。② *-γad* は主に出現、消滅などの瞬間動詞あるいは終了限界達成を含む動詞に後続し、「元の状態に戻る」、「行為の完遂・変化の達成」、「持続相」、「進行相」を表す場合に使われる。「持続相」の場合は、主に反復を表す場合に使われている。③ *-n* は、*-γad* と同じく、出現、消滅などの瞬間動詞、あるいは終了限界達成を含む動詞に後続し、「行為の完遂・変化の達成」を表す場合に使われている。④ *-γsayar* は、補助動詞 *ire-* とのみ共起し、「持続相」と「進行相」を表す場合に使われている。「進行相」を表す場合は、進展的過程動詞のみと共起することがわかった。

審査の概要及び評価

上記のようにスチンガルラ氏の博士論文は、新しい知見を多く示しつつ、各補助動詞に関して先行研究で指摘されていないいくつかの意味機能を示すことに成功している。

本論文の内容に関して、各審査委員からさまざまな評価がなされた。各委員より特に高く評価されたのは、以下の点である。

- ・補助動詞の定義を十分に行い、対象の範囲を明確にしたうえで研究を進めている。
- ・コーパスにより補助動詞ごとに、頻度の高い主動詞との組み合わせや、副動詞、否定の

現れについて客観的なデータを提示することに成功している。

- ・日本語学での成果もよく参考にした上で、モンゴル語の実情に即した独自の動詞分類を行っている。
- ・内部の方言差の大きい内モンゴル中部方言について、各作品の著者の出身地別にコーパスを再編成し、さらにアンケートも用いて補助動詞の用法における方言差を明らかにしようとしている。
- ・先行研究にない本論文での新たな知見がどのようなものであるか、明確に示すことができている。

もちろん本論文にも改善すべき点が残されている。最終試験において、審査委員からいくつかの質問、要望が出された。その指摘のうち、重要な点としては以下のようなものをあげることができる。

- ・用法を分類するにあたっては、まず「モダリティ」や「アスペクト」についても定義を行うべきだったのではないか。
- ・形態的に一部の語尾しかとらない要素については、動詞として扱うかどうかについて、よりていねいな検討が必要だったのではないか。
- ・アンケートは意味を選択させる形式のものであり、その回答も多数決として扱っているため、十分に客観的なデータとして扱うには問題がある。
- ・一部の例文の訳については、モンゴル語の細かいニュアンスが生じる一因と考えられる文法構造を過不足なく反映した逐語的な訳を示してほしかった。

各委員からのこれらの指摘も、本論文の価値を高く評価した上で今後のさらなる研究の進展を期待したものであり、建設的な意見として提言を行っているものといえる。

最終試験における質疑においても、申請者の応答は的確で、委員たちとの間で学問的に興味深い議論が行われた。その過程から、申請者が指摘された問題点をよく自覚し、今後それらを解明していくのに十分な学識と強い意欲を持っていることが確認された。モンゴル語補助動詞全般の記述研究の進展、さらにはモンゴル語と日本語の対照研究や類型論的な観点からの研究に関して、申請者の今後の活躍が十分に期待できる。

審査委員会は、学位請求論文の内容、ならびに最終試験（公開審査）の結果より総合的に検討した結果、全員一致で申請者スチンガルラ氏の学位請求論文が博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものであるという結論に達した。